父の戦争体験の再評価について

私の父は、中国[1]とシベリア[2]で第二次世界大戦における加害者と被害者の役割を担わされた。彼自身からはシベリアでの被害者体験を、お酒を飲んで酔う中で何度か聞かされたが、中国で何をしたかはたった一言のみだった。

「シベリアのことはわかったけど、中国ではどうだったの？」という私の問いに答えて、「上官に中国人は人間ではないから殺してもかまわない、豚だと思えと言われて殴られた。」と言った。その時、彼の顔が残酷さと苦痛と、なんとも形容しがたい表情だったので、私は子ども心にあまりにも恐くて、その後一切聞くのをやめた。しかし、彼は、この中国での悲惨な加害者体験をどうにか謝罪したいと、願い続けたのだろうと思う。

彼は本屋勤めという仕事のポジションを生かして、日本の辞書の古本を集め、中国の学生に贈る運動を数年にわたって行ったことがある。その古本を贈る運動をしていたときに地方紙のインタビューに答えて、彼は、「教育こそが人をつくり、人を変えることのできるもので中国の人々がもし日本語を学んでくれる意思があるのなら、これらの辞書を使ってほしい」と語っている。十代の私は、なぜ父がそのような運動を始めたのか、好奇心にもとづいた質問はしても、彼の加害者としてのすさまじい苦悩に思いをはせることは全くできなかった。

RCを始めてから、父のことを、特にその戦争体験を語ることを随分やってきた。もちろん私自身に巣くっている深い深い罪悪感から自由になりたいと思い続けてきた。それを持ったままでは、本当の意味で人とつながれないと深くわかっていたが、何度謝っても謝りきれないというほどの罪悪感だったのでなかなかそれを手放すことは難しかった。

幸いに、RCを始めて最初に行ったワークショップで、当時の中国のRRPであり、今は亡きリ・メイガに出会い、何度も謝罪を聞いてもらい、「あなたのせいでもお父さんのせいでもなかったんだよ、悪いのは政府であり、抑圧の仕組みなのだ」というコントラディクションをもらい号泣するなかで、そうした罪悪感は少しずつ消えていった（リ・メイガには心から感謝している。それと、戦後すぐに日本軍の捕虜に中国共産党の幹部がとった寛容政策のすばらしさについては、またの機会にゆっくりと書いてみたいと思っている。）

しかし、もうひとつの不可解な慢性化したパターンがしつこく残っていたのである。私は30代の前期まで自殺を何度も試みた。少しでも辛くなると、死ぬしかこの苦しみを解決できるものはないと、死ぬことばかりを考えた。実際に行動も伴ったのが、30代半ばまでだった。しかし、気分としての死にたい思いは付きまとい続けた。特に母親になってからは自分だけでなく娘と死ぬことをしょっちゅう考えては生き延びた。アメリカでインテンシブ[3]をしたとき、ダイアン

---

[1] 遊歩のお父さんが所属していた旧帝国陸軍は、１９３０年代から第二次世界大戦の終戦まで中国で戦い、侵略していた。

[2] 第二次世界大戦の終戦後、遊歩のお父さんを含めて約５０万人の日本元兵士や開拓者がソ連軍の捕虜にされて、旧ソ連にあった強制労働収容所に送られた。

[3]「インテンシブ」は、20時間にわたり、クライアントとして再評価カウンセリングを受けられるプログラムである。有料で、アメリカ、シアトル州のワシントンにあるパーソナル・カウンセラーズ社で受けられる。

[4]が「サンフランシスコのゴールデンゲートにとてもいい死に場所があるので、そこから二人を投げ込んであげる。」とあまりに嬉しそうに言われて、号泣し、大笑いしたこともある。ただこの傷をストレートに取り組んでいてもなかなか前進がないと感じ続けていた。

そこに父の戦争体験と、そのしつこい傷が生じた場所が重なっていることに気づいたのは、ここ10日くらいである。私は父に何度か非常に乱暴に扱われていたということは気づいていた。性虐待も赤ん坊のころに受けていたと確信する。しかし、これを思い出すまで、記憶の中にいる父は本質的な父ばかりであった。だから、この死にたいという思いが父の戦争体験が原因だとはながく気づけなかった。

先月、元軍医の痛恨の証言、中国人に生体解剖をした[5]という講演を聞き、本も買って読み、その後セッションをして全てがつながったのである。父は生体解剖こそしなかっただろうが、初年兵として中国の人を丸太に縛りつけ、銃剣でぐさぐさ刺すことを手始めに、略奪・殺人、ありとあらゆることをやらされたに違いない。私が生まれたときに父は、私の足[6]を見て「天罰が下った」と思ったそうだ。それを聞いたのは父が肺がんで死ぬ数ヶ月前だった。天罰が下ったという言い方が、私の中にいる父の愛情深さとは全く違ったからこそ、怒りまくれたのだが、今は怒りよりもあまりの悲しみが湧いてくる。

私の体に対する医学からの治療は（虐待であると私は認識しているが）生後40日目から開始された。注射の痛み、不愉快で、毎夜泣き叫び、母はその私を抱いておろおろする。仕事から疲れて帰ってきた父がまさに中国の悪夢をよみがえたのだろう。あまりの再刺激に一刻も早く「死んでくれ」とか、酒を飲んでからは、「俺が殺してやる」と毎夜母親に迫り続けたのだった。母親は、「お前たちがいなければ絶対離婚していた」と何度か言っていた。

母が泣いている私を背負って外に出ると、彼は残された幼い私の兄の寝顔をみながら、ここは中国の戦場ではないことに気づいたのだろうと思う。そして、私が少しずつ言葉を話すようになると、そのあまりのかわいらしさに、本質がよみがえり、ただただ愛情だけで私に向き合うことが可能になっていったのだろうと思う。そこに行き着くまでの母親の愛情と兄や妹の存在、そして母親側の親や、親戚たちがくれた様々なサポートは、彼の良心を完全に目覚めさせ、その後の記憶には一切彼からの殺意はない。

生後即日から2,3年、父親に死を願われたことなくして、このようにも深い死への思いはありえるはずはないのだと気づいて、自分と父親の長い旅がようやく一区切りついた気がしている。ここ2週間以上娘が肺炎の高熱で倒れていたが、最初の1週間はその死への思いが出てきて、混乱したが、ここ1週間はようやくどんなに辛くても、自動的に死にたいという気分は湧いてきていない。

死にたいという気分は、全く私自身で生み出したものではなかったのだ。生まれたときから持っていたものでは全くなく、父親のあまりに辛い戦争体験が私に強力に伝染してのことだった。

---

[4] ダイアン・シスク、国際照会者のオルター。

[5] この元軍医の証言によって、旧帝国陸軍では、例えば中国人の捕虜をわざと銃で撃って、兵士たちがその治療をする訓練した。ただし、兵士たちは治療が上手でなく、捕虜はほとんど死んだという。

[6] 遊歩は骨形成不全症（「ガラスの骨」）を持って生まれた。

本当にどの人のどの傷も歴史上繰り返し行われた、戦争の巨大な抑圧・傷につながっているものだと、心から確信している。

My Father’s Wartime Experiences: A Re-evaluation
プレゼントタイム2007年1月号 28 – 30 ページより
Yuho Asaka
安積 遊歩
英訳：エマ・パーカー

この文章の著作権はラショナルアイランド社にあります。(原文２００７年)。